1/3 早福

「神の火」のそばで

福井の原発 半世紀

2

語ることはやめない

明光寺（敦賀）住職 立花京子さん（69）

「少欲知足」。敦賀半島の付け根に位置する敦賀市名子の集落。十二月中旬の底冷えする明光寺の本堂で、住職の立花京子さん（六九）はその言葉の重要性を語った。「欲が少なく、満足することを知ること」という仏教の根本精神。原発と向き合い続けたからこそ、身に染みている。

京都府出身。明光寺の家に生まれた夫・正寛さんとの出会いは、デザインを学んでいた京都の大学のゼミだった。一九七五（昭和五十）年、結婚してすぐに、ともに名子へ。寺の勤めのほか、二人で陶芸に取り組んだ。

名子の北約八キロ、敦賀半島の先端では七〇年三月、敦賀原発1号機が運転を始めていた。京子さんは名子に来た当初、「原発は夢のエネルギー」と信じていた。しかし、原発の危険な現場作業や病気になった作業員の話を聞くにつれ、「母親として私は放射能について何も知らない」と気になり始めた。

正寛さんとともに、原発の専門家を招いて勉強会を開くようになった。放射線の影響を受けると青い花びらにピンク色の斑目が出るムラサキツユクサの観測を始めた。事故などが起こると、如実に変化が表れた。

八一年四月、敦賀1号機の放射性廃液漏れの事故隠しが発覚。「より大きな事故を隠しているのでは」。不信感は募った。五歳だった息子の安全を考え、京都の京子さんの実家へ家族で引っ越した。「親子仲が悪い」「仕事がないからだ」。心無い中傷が聞こえてきた。

京都で過ごす間も、正寛さんは県内外の講演会で敦賀の現状や命の大切さを説き続けた。京子さんが表に出ることは少なかったが、講演の原稿を二人で話し合いながら考えるなど活動は常に二人三脚。八九年、正寛さんの父親が病気で死去し、正寛さんが寺を継ぐため一家で名子へ戻った。だが、正寛さんも九四年にがんでこの世を去った。二人で生前約束した通り、京子さんが後を継いだ。

原発が立ち並ぶ敦賀半島で原発に反対するのは「異端児」（京子さん）。住職になりたての頃、門徒の家でお経をあげると、隣の部屋に原子力事業者や区長が待ち構え、原発の良さを説かれた。心配した親戚からは「（正寛さんは）男やからいいけどあんたは無理。原発反対って言わんほうがええで」と言われた。「地元にいながら反対することに主人は悩んでいた。夫もしんどかったと思う。今なら分かる」。正寛さんの苦労をしのぶ。

二〇一六年、敦賀市では初めての女性区長となった。原発の新設を求める区長らと意見はかみ合わない。それでも、語ることはやめない。法話では必ず一度は原発に触れ、頼まれれば自らの考えをはっきりと話す。「すべての命がどれだけ大切かということを言わないと、私の役目がない。目先の金では、あがなえないものがあるのでは」

心に決めていることは、原発について伝えること、勉強し続けること。そして未来を生きる子どもたちに原発について学んでもらうこと。「原発が安全であってほしいけど、安全と思えないから反対している。責めているのではなく、まだ間に合うから、相反するのではなく一緒に考えていきたい」

（大串真理）

「宗教者として命の大切さを伝えたい」と語る立花京子さん＝敦賀市名子の明光寺で（蓮覚寺宏絵撮影）